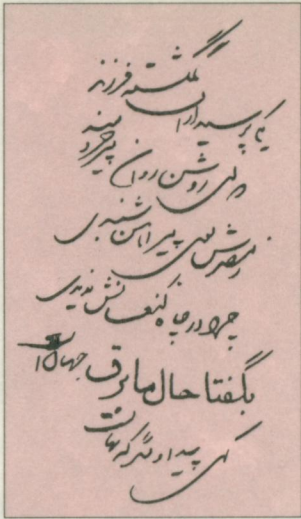


# イスラーム 政治神学

ワラーヤとウイラーヤ



松本耿郎 著

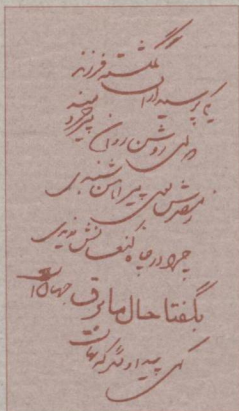
未來社

定価2884円(本体2800円・税84円)

ISBN4-624-11147-8 C0022 P2884E

# イスラーム 政治神学

ワラーヤとウイラーヤ



松本耿郎著

未來社

# イスラーム政治神学

——ワラーヤとウイラーヤ……目次

はじめに 7

第二章▼イスラームの存在論と神名論 9

1 神名の意味するもの 13

2 神の現れ 19

3 存在の階層 23

第二章▼ワラーヤの意味論 32

1 コーランに見えるワラーヤ 32

2 ワラーヤとウィラーヤ 37

第三章▼スーフイズムとワラーヤ 48

1 預言者性と誠実者性 48

2 預言者性とワラーヤ 53

3 イブン・アラビーのワラーヤとヌブーワ 64

第四章▼預言者性の封印とワラーヤの封印 82

第五章▼「玄秘の花園」のワラーヤ論 100

1 存在論的郷愁 100

2 「玄秘の花園」のワラーヤ観 105

3 太陽のワラーヤと月のワラーヤ 109

第六章▼ヒラーファ（代理者権）とワラーヤ 122

1 カリフもしくはハリーフアについて 122

2 歴史的カリフ 123

3 神学的カリフ 125

4 イブン・アラビーのカリフ論 129

第七章▼ウィラーヤ（監督権）の起源 135

1 政治的主題としてのウィラーヤ 135

2 ウィラーヤ概念の発展 141

3 ウィラーヤの継承者 151

第八章▼ウィラーヤの形而上学 160

第九章▼法学者の監督権——ホメイニーのウイラーヤ論

180

注

197

基礎語彙解説

209

あとがき

217

イスラーム政治神学——ワラーヤとウイラーヤ



## はじめに

これから取り上げる主題は、イスラーム神秘主義者の長年に及ぶ精神修養とそれに基づく神秘的直観によってのみ「理解」できるものであり、通常の学問的レベルでの理解を拒絶する部分を含んでいる主題である。この問題に取り組みきつかけとなったものは、一九七九年にイランで起こったイスラーム革命である。「法学者の監督権」という政治理論を構想したホメイニーによりイスラーム政体が樹立されたことが問題の出発点になっている。

私事に互るが、筆者がイランに一六年前に留学していたころ、ホメイニーという人の名前をしばしば耳にした。当時筆者がマッシュハド大学神学部で師事していたアーシュティヤニー教授はホメイニーの学灯を受け継いだ人だった。当時、ホメイニーはイランの王政打倒の運動を指導したかどで、隣国のイラクに追放されていた。秘密警察の監視の厳しい当時のイランでホメイニーのことを噂するだけでも危険なことだった。しかしアーシュティヤニー教授は、ホメイニーの人物について、またホ

メイニーの思想についてしばしば話していた。ホメイニーは国王から国外追放されるときにイスラーム哲学や神秘思想関係の蔵書や彼自身の書いた哲学論文の草稿などをすべてアーシュティヤニー教授に託して出国したという。アーシュティヤニー教授は当時ホメイニーの著作は発禁になっていたにもかかわらず、純粹に哲学や神秘思想についての論文ならば出版してもよいという判断で、ホメイニーのその分野に関する論文の印刷を計画していた。ともかく、筆者はホメイニーという人をその当時、政治的指導者というよりむしろイスラーム神秘哲学の巨匠として認識していた。したがって日本へ帰国後しばらくしてから、ホメイニーがイスラーム革命の指導者として世界史の舞台に踊りでできたことに、たいへん驚いた。

なぜイスラーム神秘思想の巨匠が革命運動の闘士となることができるのか。神秘思想などというとおよそ浮世離れたものではないのか。そういうことを研究していた人がどうしてあのように過激で不屈の革命思想をもち得るのか、そんな疑問がむくむくと胸のなかに頭を擡げてきた。そして、折しもイスラーム革命運動が高揚するなかで、ホメイニーの著書「法学者の監督権・イスラーム政権論」が、イラン・イスラーム革命の基本理念を表わした本として世間の注目を集めるようになる。

この本はイスラーム法に通じたイスラーム法学者——これをアラビア語やペルシア語でファキーフ *faqih* という——がイスラーム教徒の国を統治すべきである、ということをもイスラームの歴史に基づいて、またイスラーム法の精神と規定に即して、また哲学的にも論証しているものである。イスラーム神秘思想とイスラーム革命思想との関係を解く鍵はおそらくこの本のなかにあるだろう、という角度から研究を進めた結果がこの本となった。

## 第一章▼イスラームの存在論と神名論

一九七九年に起こったイラン・イスラーム革命の指導者ホメイニーが自らの政治思想を述べた著書には「ウィラーヤ・テ・ファキーフ (wilāyat-e faqih)<sup>\*1</sup>」という標題がついている。この語句は日本語では「法学者の監督権」としばしば訳されている。「法学者」をアラビア語・ペルシア語でファキーフというが、「監督権」にあたる単語はアラビア語でウィラーヤ (wīlāyah) ないしペルシア語でウィラーヤト (wīlāyat) という。現代中東政治の専門家たちはこのウィラーヤという単語を便宜的に「監督権」ないしそれに類する言葉に訳している。しかしながら、この言葉は翻訳するのに大変厄介な言葉である。実際、イラン革命が始まって、まだこの言葉に定着した訳語が存在していなかったころ、日本の外務省のペルシア語専門官の友人から、ウィラーヤトというのはなんと訳せばよいのだろうか、という質問を受けて、筆者もはたと当惑してしまったという記憶がある。なぜなら、語源の意味を汲み入れこの言葉を訳出しようとしても、日本語にびったりと意味を重ね合わせることができない

ような単語が見あたらないからである。しかも、この単語にはワラーヤ (walayah) というもう一つの読み方が存在して、この読み方を採れば意味も先ほどのウィラーヤと違ってくる。

周知のとおりアラビア語・ペルシア語は、子音文字だけを用いて単語を表記するから、一つの単語表記にいくとおりもの母音の付け方ができる。かりに、k, t, b という子音文字がこの順番に並んでいたとすれば、これは *katba* (彼は書いた) と読むことができ、*kutiba* (それは書かれた) と読むことができ、また *kutub* (本の複数) と読むこともできる。いずれの読みかたを取るかは文脈によって決めなければならない。ただし、いずれも「書く」という行為に深くかかわった言葉である。要するに、アラビア語はいくつかの子音がある順番にならんでいて、それに文法規則に基づき短母音をついたり、長母音をついたり、特殊な子音を挿入したり、あるいは接頭辞をついたりしながら言葉をつくり、意味を変えていくという性質を持つ。そして、その最も基本的な子音の配列を語根と呼ぶ。つまり、ある基本的な意味をもった語根がいろいろに語形変化して、別な単語を作ってゆく。勿論、こうして造りだされる様々な単語が語根のもつ意味と深い関係を保っていることはいうまでもない。

とまれ、これ以上アラビア語の初級文法の説明を続けても無意味であるが、これからの議論の進行は以上のようなアラビア語の基本的特性についての知識を踏まえていることを付け加えておく。

ところで、先ほどのウィラーヤという単語は、ワリヤ (waliya) という語根からできてきた言葉である。その基本的な意味は「しかじかのものないし人の近くにいろ」ということである。この語根か

ら派生してきた言葉にワリー (wali) という言葉がある。これは、したがって基本的には「近くに  
 いるもの」という意味である。ところで、日常、我々の近くににいるものにも様々な種類がある。どのよ  
 うなものでも近くににいるものならば、「近くににいるもの」と呼ぶことができる。したがって、アラビ  
 ア人もまたこのワリーという言葉で、自分の身近にいる様々なものにたいして振り当てている。すな  
 わち、二人の人間の間で主人と従僕という関係があるとすれば、従僕の方は主人にたいして、ワリ  
 ーという呼びかけをすることができ、また主人は従僕を身近なおつきのものという意味でワリーと見  
 なすことができる。

それゆえ、ワリーという言葉は主人という意味を持つこともあり、付人という意味を持つこともあ  
 り、あるいはそこから意味が発展して、後見人、監督者、保護者、あるいはまた、友人とか助ける人  
 という意味にも用いられる。さらに、これは大変重要なことであるが、イスラームの經典コーランの  
 なかで、このワリーという言葉が人間の主人である神アッラーにたいしても用いられているのであ  
 る。

コーランの第四二章七節<sup>\*2</sup>に「アッラーこそはワリーである」と記されている。また同じく二七節にも  
 「かのお方こそ褒めたたえるべきワリー」とある。あるいは第三章六一節にも、また別の箇所にもア  
 ッラーがワリーという言葉でよばれている多くの例がある。コーランに出てくるこれらのワリーとい  
 う語の意味はそれぞれ文脈に応じて「主」という意味であったり、「保護者」という意味になったり、  
 「援助者」という意味になったり、あるいはその他の意味になったりするが、根本的には「身近にい

てなにか有益なことをしてくれる良い者」という意味で用いられている。

かくて、ワリーという言葉は「身近にいるお方」という基本的な意味を含むと同時に、神アッラーを呼ぶのにも用いられる。それでは、神はどれほどわれわれの身近にいるかというところ、これについてコーランのなかに大変有名な言葉がある。すなわちそれは、第五十章十四節に見られるところの「人間の首の血管よりも、もっと近い」という言葉である。これはある種の皮膚感覚を呼び覚ます非常に現実味のある表現である。このほかにも神が身近にいるということを示す言葉は第二章一八二節、第十一章六四節、第三四章四九節などに見ることがができる。

なお、コーランはイスラーム教徒にとっては、神自らが預言者ムハンマドを通じて直接人間に語りかけた言葉の記録であると見なされている。したがって、神が人間の身近にいるというコーランの言葉は、それが神自身の言葉でもあるということから、強力極まりない証なのである。しかもコーランは神自身の意志のこの世への顕現の事実を伝えるものである。これゆえに、神の意志のこの世における具現というかぎりでは、コーランはキリスト教のイエス・キリストに対応する機能をイスラーム教において持っているわけである。

ともかく、このように神は人間にとり身近な存在であるとされているのだが、人間にはそのことがなかなか解らないのが現実である。そこで神は預言者を派遣し、コーランという奇跡を表わし、神の存在を人間に示し、神の命令に服するよう人間に呼びかけているのである。しかしながらそれでもなお、人間にはなかなか神を知ることができず、また知ろうともしない人々が大勢いる。そのため、神

は自らをただ神であると宣言するだけではなしに、「私は、おまえたちの主である」とか、「私はおまえたちを養うものである」とか、「おまえたちを保護するものである」とか、「おまえたちを愛するものである」とか、あるいは自分は「慈悲深いものである」とか、「全能のものである」とか、いろいろの別称を用いて人間に自らの存在を悟らせようとしている。これは、なんとかして神の存在を人間に知らしめ、人間を迷いの道から救い出してやろうという大慈悲心の現れと見ることができよう。

---

### 1 神名の意味するもの

---

ところで、どこからともなくまた何者とも解らぬ者から突然「私は神であるぞ」と名乗られても、普通の人はその本来の意味を理解することができない。事実、預言者ムハンマド自身ですら最初に神から語りかけられたとき、いったい自分が誰から呼びかけられたのかさっぱり解らず、ただ恐れおのき狼狽するばかりだったほどである。<sup>\*3</sup>このように預言者が狼狽したということは、神という名詞の特殊性をよく示しているたいへん重要なことである。すなわち、「神（アッラー）」といただけではなにも内容を伝えることができない、ということである。このことは、神という名詞はそれ自体では具体的意味をなにも示していないということになるであろう。だからこそ、素朴な無神論者がしばしば「神ってなんだい、そんなものいやじゃないか、いれば見せてもらおうじゃないか」などというのに出会うのである。したがって、具体的には指示対象を持たないということが神という名詞の特徴といえる。そういう意味では「神」という名詞は「無」に等しいということになる。ただし、

この場合にいう「無」は「非存在」とは別である。

しかしながら、コーランのなかでは、神は幾つもの肩書ないし別称によって、すなわち神を指し示す言葉で自分を表示しているわけである。ともかく、イスラーム教徒たちは神を指し示す神の別称が九十九あると考えている。これがいわゆる神アッラーの九十九の神名と呼ばれるものであって、イスラーム世界以外においてもたいへんよく知られている。ただ注意しなければならないのは九十九の神名というのは厳密には九十九の美しい神名と呼ばれるものを意味している。実際には、九十九の美しい神名のほかにも様々な神名を持ちあわせている。通常、九十九の神名というのは、アッラー Allāh という名詞も含めて、以下のように並べられている。

- (1) 「大慈者 al-rahmān」 (2) 「大悲者 al-rahīm」 (3) 「王者 al-malik」 (4) 「至聖者 al-quddūs」 (5) 「平安者 al-salām」 (6) 「信仰者 al-mu'min」 (7) 「保護者 al-muḥaymin」 (8) 「偉大なる者 al-'azīz」 (9) 「強力なる者 al-jabbār」 (10) 「大いなる者 al-mutakabbir」 (11) 「創造者 al-khāliq」 (12) 「造物主 al-bārī」 (13) 「造形者 al-musawwir」 (14) 「ゆるす者 al-ghaffār」 (15) 「征服者 al-qahhār」 (16) 「与え与え者 al-wahhāb」 (17) 「養育者 al-razzāq」 (18) 「解放者 al-fattāh」 (19) 「知る者 al-'alīm」 (20) 「保持者 al-qābid」 (21) 「展開する者 al-bāsīt」 (22) 「低くする者 al-khāfiḍ」 (23) 「高くする者 al-rāfi'」 (24) 「榮譽を与える者 al-mu'izz」 (25) 「くくきくくくせる者 al-mudhill」 (26) 「耳聴い者 al-samī'」 (27) 「よく見通す者 al-basīr」 (28) 「裁定者 al-hakam」 (29) 「正義をなす者 al-'adl」 (30) 「親切な者 al-



- latif', (31) 「熟知する者 al-khabir', (32) 「温和な者 al-halim', (33) 「偉大な者 al-'azim', (34) 「有怨する者 ghaḥūr', (35) 「感謝する者 al-shakūr', (36) 「至高の者 al-'alī', (37) 「大なる者 al-kabīr', (38) 「保護者 al-hafīz', (39) 「育成する者 al-muqīt', (40) 「勘定をきざんとする者 al-hasīb', (41) 「壮麗な者 al-jalīl', (42) 「寛大な者 al-karīm', (43) 「注意深い者 al-raḡīb', (44) 「答える者 al-mujīb', (45) 「広大な者 al-wāsi', (46) 「穀知者 al-hakīm', (47) 「愛する者 al-wadūd', (48) 「栄光ある者 al-majīd', (49) 「蘇らせる者 al-bā'ith', (50) 「証明者 al-shahīd', (51) 「真実の者 al-haqq', (52) 「棉依の対象となる者 al-wakil', (53) 「強力な者 al-gawī', (54) 「確固たる者 al-matīn', (55) 「身近な友 al-walī', (56) 「誉むべき者 al-hamīd', (57) 「数える者 al-muhsī', (58) 「開始する者 al-mubdī', (59) 「もとに戻す者 al-mu'īd', (60) 「命を与える者 al-muhīy', (61) 「死なせる者 al-mumīt', (62) 「生ける者 al-hayy', (63) 「永続する者 al-qayyūm', (64) 「充足する者 al-wājīd', (65) 「光輝ある者 al-majīd', (66) 「唯一者 al-wāhid', (67) 「永遠者 al-samad', (68) 「能力ある者 al-qādir', (69) 「権能ある者 al-muqtadir', (70) 「順序を先じやせる者 al-muqaddim', (71) 「順序を後回しにする者 al-mu'akhkhir', (72) 「最初の者 al-awwal', (73) 「最後の者 al-ākhir', (74) 「表に現れる者 al-sāhir', (75) 「裏に潜む者 al-bātin', (76) 「統治者 al-walī', (77) 「じや高き者 al-muta'ālī', (78) 「誠実なる者 al-barr', (79) 「思ふ直す者 al-tawwāb', (80) 「仕返しをする者 al-muntaqim', (81) 「罪を免除する者 al-'afw', (82) 「慈悲深い者 al-ra'ūf', (83) 「王権の所有者 mālik al-mulk', (84) 「栄光と栄誉の所有者 Dhū al-jalāl wa al-ikrām', (85) 「公正なる者 al-muqsīt', (86) 「統

合する者 al-jāmi' (87) 「充足して他を必要としない者 al-ghani' (88) 「自足する者 al-mughni' (89) 「抑制する者 al-māni' (90) 「損害を与える者 al-dār' (91) 「利益を与える者 al-nāfi' (92) 「光 al-nūr' (93) 「導き手 al-hādī' (94) 「驚嘆すべき者 al-badī' (95) 「永続する者 al-bāqī' (96) 「遺産の継承者 al-wārith' (97) 「正道を歩む者 al-rashīd' (98) 「忍耐強い者 al-sabūr'。

この九十八の神名に「アッラー」を加えたものが九十九の神名と呼ばれるものである。しかしながら、神名とは神と世界との様々な関係にたいしてそれぞれつけられた名称であるという考えに基づき、神名は九十九個に限らないという主張もある。この見方によれば神と世界の関係が多様複雑を極め、無数に区別されることから、神名もまた無数にあるという主張を導き出す。しかし、これら無数の神名群もグループ分けして九十九に集約することができるとしている場合もある。

ところで、神アッラーという名前とそのほかの九十八の名称とがどのような関係にあるのかという問題についてイスラーム世界の人々は議論を重ねてきた。ある人びとは九十八の神名はアッラーというおおもとの名称に所属しているのである、と主張し、だからその限りでは、アッラーという名称は九十八の神名にとっての本質であるとした。また属性 (attribut) と基体 (substrat) という角度からみるとアッラーという神名は基体に当たると見た。事実、ガザリー(二一一年没)は「アッラーとは真実なる存在者、神的属性を統合する者、神的主長者性の持つ属性の基体にとっての名称である」と述べている。この場合、当然九十八の神名は神というおおもとの名称にとっての属性ということに

なるであろう。しかも、九十八の神名はその場合アッラーから生まれでてきた、と見なすことができるので、アッラーという名称はもろもろの神名にとってのおおもとのものだということができる。このように他の神名にとってのおおもととなるような名称を「最大の名称」と呼ぶことがある。この最大の名称ということ、アル・イスマ・ル・アアザム (al-ism al-a'zam) とアラビア語でいう。ガザリーのような考えかたによればアッラーという名称が「最大の名称」であるということになるであろう。しかしながら、他方にはアッラーという名称もまた九十九の神名のうちの一つであるから、アッラーが他の神名群にとつての基体になるというものではない、むしろアッラーも含めた九十九の神名が属性として付着するような基体があるのだと考える人々もいる。この場合には、この基体となる存在には特に名称が付けられていない。ただし、この名称のない基体と諸神名の間にはなんの区別もないと見なされている。この場合、神名の基体となるものを神の本質 (ザート、*dhāt*) と呼ぶ。神名の一つ一つはザートの顕現であるので、ザートと神名の間には主語述語の区別はないし、神名それぞれの間にも互いに排除しあうような区別はないとされる。それというのも、それぞれの神名はザートの顕現なのであるから、それらの神名は結局ザートを指し示しているにすぎないと見なされるからである。その限りで、神名 a と神名 b として神名 n は同じであるとされる。このような立場に立てば、ある特定の神名が「最大の名称」であるということもなくなってくる。むしろ、神名のどれもが「最大の名称」であるということになる。それにもかかわらず、それぞれの神名は一つ一つが独立していると思なされている。それは、存在論の観点からすると、それぞれの神名がそれぞれリアリティ (haqiqah) を持つと考えられているからである。勿論、この場合にかのザートもまたリアリティ

ーであることに変わりはない。ザートのリアリティーは諸々の神名のリアリティーの原因となるとされる。このことについては後ほどより詳しく考察することとなる。

しかしながら、アッラーという名称はなにか特定の性質や意味を示していないし、また「アッラーは大慈者である」というように他の神名にたいして主語の位置にすることができるといふ理由で、アッラーという名称が「最大の名称」であるというのが一般的な理解になっている。ただし、十二世紀のイブン・アラビーは諸々の神名の間には、等級上の区別があるとしている。それはたとえば「知る者」という神名の意味を分析すれば「意欲する者」という神名よりも等級が上になるといふことである。<sup>\*6</sup>その理由は、常識的に考えて、なにかについての意欲が生じるのはそのものについての知が先にあるからなのであり、したがって知は意欲に先立つのだから、「知る者」といふ神名もまた「意欲する者」といふ神名に先立つといふものである。イブン・アラビーはこのような観点から諸々の神名を整理し等級づけをすると、一番上位に位置するのは「大慈者 al-Rahmān」になるとしている。<sup>\*7</sup>この場合、「大慈者」は「アッラー」と同等の神名であると考えられている。

ところで、前記の「身近に在るもの」の身近さといふことに立ち返ってみれば、神における身近さという点ではこの「最大の名称」である「アッラー」とその他諸々の神名、もしくは神のザートとその属性である諸々の神名ほどには近い関係にないといふことになる。これは最大の名称である「アッラー」は自らの神名にたいしてワラーヤ（身近さ、近しさ）をもっているといふことでもある。このことは、アッラーという「最大の名称」はその多数の神名にたいしてワリーの地位にあるといふこと

にもなろう。ないしは、ザートが諸々の神名にたいしワリーの地位にあるということになるであろう。

ところで神認識という観点からすれば、先ほどの預言者ムハンマドが何か訳の解らないもの呼びかけられ、恐れおのき狼狽したということは彼がアッラーから呼びかけられたということすら理解していなかったということ物語っている。別の見方をすれば、預言者の認識において、この時点ではアッラーはアッラーとしてまだ姿を表わしていなかったということになる。別の言い方をすれば、アッラーは様々な神名を帯びて自らの存在を預言者に認識させていない、ということになる。さらに換言すれば、いっさいの神名を取り払ったザートのレベルの神がそこに存在しているということになり、それは認識できないがゆえにかくもおどろおどろしく戦慄すべき存在なのである。

## 2 神の現れ

このアッラーがアッラーとして現れる以前の状態についてイスラームの思想家たちは、様々な説を唱えた。一般的にイブン・アラビーに代表される存在一性論派の人々は預言者を含めて人間の意識に神が神として認識される以前のこのような状態をガイブル・フォーウィーヤ (ghayb al-hūwīyah) ないしガイブル・ムトゥラク (ghayb al-mutlak) と呼ぶ。あるいは省略してただガイブと呼ぶこともある。井筒俊彦博士はこのガイブという言葉を「絶対不可視状態」と訳されている。イブン・アラビーはこの状態を、また別の角度から分析して、アハディーヤ (ahadiyah) のレベル (ma-